佐久市立臼田小学校　学校便り　№9　R7．１２．５　　文責　村山（教頭）

コスモ・スクール　うすだ

一人一人が輝き　つながり　未来を拓く

しみじみ清掃の姿から

臼田小学校には、清掃の合い言葉があります。「しみじみ清掃」。
その「し」は「しずかに」。ただ静かに掃除をするということではありません。静けさの中で、自分と向き合い、仲間と呼吸を合わせ、場を整える時間を大切にする。そんな願いが込められています。

先日のことです。昇降口で私が掃除をしていると、昇降口のたたき（玄関土間）を担当する二年生が談笑しながら掃除を始めようとしていました。私は声をかけます。「しみじみ清掃だよ。静かに掃除をしましょう。」その言葉に、子どもたちはふっと表情を変え、箒を握り直しました。静けさが戻り、空気が澄んでいきます。

私が箒立てを持ち上げて掃こうとしたとき、さっと二年生が駆け寄り、ほうきを動かしました。目を上げると、図書館の入り口で、引き戸の溝に抜けたほうきの先を差し込み、ゴミを掻き出す姿があります。昇降口のたたきでは、言葉を交わさずともゴミが一か所に集まり、誰かが自然に塵取りを取りに行く。その連なりに、私は胸を打たれました。

そこにあるのは、命令でも義務でもない、静かな協働です。

「無言清掃」は長野県独自の価値観だと思われがちですが、今やその精神は全国に広がりつつあります。静けさの中で、子どもたちは何を感じているのでしょうか。きっと、「自分が場を整えている」という誇り。そして、「仲間とつながっている」という安心。言葉を超えたやりとりが、子どもたちの心を耕しています。

掃除は、ただの作業ではありません。場を整えることは、心を整えること。臼田小学校の「しみじみ清掃」は、そのことを子どもたちに教えてくれています。

今回は、「しみじみ清掃」の「し」についてお伝えしましたが、残りの「みじみ」には、どのような言葉が当てられているのか、お子さんに聞いてみてください。

「ありがとうございます。」

朝の昇降口。冷たい空気の中、登校してきた子に「おはよう」と声を掛けます。すると「おはようございます。」と、その挨拶が、まっすぐに届く瞬間があります。声の張り、目は輝き、そこにあるのはただの挨拶ではなく、心の温度です。思わず私は、「いい挨拶だねぇ」と声をかけてしまうのです。

すると、そのようなお子さんの多くは、こう返してくれます。「ありがとうございます。」と。

その返事を聞いたとき、私は心の中でつぶやきます。「こちらこそ、ありがとう。」

ありがとうに、ありがとうで返したくなる。そこに生まれるのは、言葉やりとり以上のものです。互いの心が、ほんの一瞬、やわらかく触れ合う感覚です。

「おはようございます」という言葉には、そんな豊かさが宿っています。語源をたどると、歌舞伎の世界に行き着きます。舞台に立つ役者をねぎらう「お早いお着きでございます」「お早くからご苦労様でございます」。その言葉が時を経て、今の形になったといいます。

つまり、「おはようございます」は、ねぎらいの言葉。相手を思いやる心から生まれた言葉なのです。

朝の挨拶は、ただの習慣ではありません。そこには、人と人を結ぶ糸があります。一本の糸が、ありがとうを運び、またありがとうで結び返される。その小さな循環が、学校という場を、少しずつ温めていくのだと思うのです。

学級閉鎖や休校へのご対応ありがとうございました。

11 月中旬より、本校ではインフルエンザが急速に広がり、多くのお子さんが罹患してしまいました。そのため、学級閉鎖や休校といった対応を取らせていただきました。

この際、保護者の皆様には、オクレンジャーを通じてお子さんの罹患状況を速やかにお知らせいただき、誠にありがとうございました。皆様のご協力のおかげで、登校後に学級閉鎖を行うことなく、急なお子さんのお迎えなど保護者の方に大きな負担をかけずに対応することができました。

また、今回の流行を受け、本校では 治癒証明書をオクレンジャーや学校ホームページに掲載する仕組みを導入いたしました。これにより、保護者の方が来校して証明書を受け取る負担を軽減し、感染リスクを避けることができます。もちろん、これまで通り学校での受け取りも可能です。その際は準備をいたしますので、オクレンジャーでお知らせください。

引き続き、お子さんの健康管理にご協力をお願いいたします。

なかよし旬間　～校長講話　権利の熱気球から～

11 月の「なかよし旬間」では、人権参観日やPTA 講演会に加え、校長講話として「権利の熱気球」をテーマにしたワークショップが行われました。

このワークショップは、グループで「熱気球に乗って旅をする」という設定で進みます。熱気球を軽くし高度を保つために、「権利の荷物」を順に捨てていくという体験を通して、子どもたちは 「どの権利も大切であること」「他者の意見を尊重すること」を深く考えました。

対話の場面では、自分と同じ意見にうなずいたり、意外な意見に「どうして？」と問い返したりする姿があり、笑顔の中にも真剣さがありました。子どもたちの声に耳を傾けると、こんな言葉が聞こえてきます。

「仲間を信じられなくなるから、いじめられたり命令されない権利が大事」

「失敗を許してもらえることで友情や信頼感が生まれるから、正直な意見を言い、それを聞いてもらう権利が大切」

「親切にしてもらえないと心が傷つくから、親切にしてもらえる権利が必要」

こうした言葉には、子どもたちが「人権は生活の土台であり、心の安心を支えるもの」と感じ取っていることが表れています。

ワークショップ後には、「権利は大切なものなんだなと思った」「生きるために必要な権利がたくさんある」「権利がないと生活できなくなる」といった感想が寄せられました。

人権は、誰かに与えられるものではなく、すべての人が生まれながらにもっているものです。この学びを通して、子どもたちはその意味を自分の言葉で確かめ、仲間とともに考える時間を過ごしました。

権利の熱気球

ア きれいな空気を吸う権利
イ 自由にできるお金をもつ権利
ウ みんなと異なっているところを認められる権利
エ いじめられたり、命令されない権利
オ 十分な食べ物と水を得る権利
カ 遊べる（体を休める）時間をもつ権利
キ 好きな本を読む権利
ク 毎年、旅行をして休みを楽しむ権利
ケ 正直な意見を言い、それを聞いてもらう権利
コ 周囲の人から親切にしてもらえる権利
サ 自分の失敗を許してもらう権利
シ お店で好きな商品を選べる権利
ス 愛し、愛される権利
セ 私だけの部屋をもつ権利